

## 平成 28 年度 第 2 回三重県経営戦略会議概要

日 時：平成 28 年 9 月 16 日（金）14:00～15:40

場 所：高田会館大ホール

出席者：田中委員、西村委員、速水委員（座長）、松本委員、  
宮崎委員、鈴木知事

### はじめに

#### 鈴木知事：

- ・前回の会議ではサミットを踏まえた宣言作りのためのキーワードを議論いただいた。サミット閉幕から半年となる 11 月下旬を目途に最終的に作り上げたいと思っているが、先日の議会では、骨子案として「和の心」を一つのキーコンセプトにしなが、調和、神話、平和、和の文化など、そういう聖地を目指していこうと説明した。
- ・サミットにより様々な成果、効果も生まれている。観光庁の宿泊統計調査では、サミット後の 6 月の宿泊者数の対前年伸び率が、全国マイナス 1.2%、東海 4 県マイナス 4.3%に対して、三重県だけがプラス 9.3%という状況になっている。ただ、個々の施設をみれば、まだら模様であり、いかに全県に波及させていくかが今後の課題だと思っている。
- ・現在、リオパラリンピックが行われているが、オリンピック、パラリンピックにおいて、吉田沙保里選手、土性沙羅選手、前川楓選手など三重県出身の選手の皆さんが大活躍をしている。東京オリンピックとその翌年の三重とこわか国体に向け、しっかりと競技力の向上を進めていきたい。
- ・本日は、みえ県民意識調査をもとに分析レポートを作成したので、その結果からどういう施策につなげていくべきなのか、議論をしていただきたい。前半は「高齢者の幸福実感向上」、後半は「少子化対策」と「女性活躍の推進」をテーマに様々な示唆をいただければと思っている。

### 議題 「第 5 回みえ県民意識調査」結果から考える県政の課題 ・高齢者の幸福実感向上

#### 宮崎委員：

- ・女性は元々地域社会と密接、濃密な関係があるので良いが、男性は定年で職場を離れたら地域社会に入っていけない。私自身、町内会へ行っても、本当に顔見知りがない。どこかでうまくマッチングをすることが重要だと思う。
- ・これは一つの例だが、私が理事をしているゴルフ・カントリークラブで 50 周年記念として非常に安い値段で新規会員を募集したら、新しいリレーション

シップを求めて、55歳から65歳の人がたくさん来て、そこから友達付き合いが始まった例を見た。やはり男というのは何かに属していないとうまく関係を作れないのではないかと自身を省みても思うところだ。

- 「イクジイ」「イクバア」というのもキーワードだと思う。我が家のように子ども達が独立してしまうと夫婦二人になり、部屋がたくさん余ってくる。例えば、待機児童を解消するための方法として、お孫さんだけではなくて他人の子どもを預かるということも考えられる。老後にある種、使命感を持って、大事な子育ての手伝いをするということになる。一種の Airbnb（エアビーアンドビー）みたいなもので、子ども達を預かるような仕組みがあっても良い。昔はそれが自然にできていたが、今はほとんどそういう人達や行動がなくなったので、地域にそういうものがあっても良いのではないか。
- 私は今65歳なので、健康の問題が非常に気になる。例えば、家庭医と病院との連携をうまくして欲しい。私が住んでいる四日市には総合病院が3つあるので、紹介してもらってすぐに行けるような仕組みがあると良い。家庭医で診てもらった検査結果が共有されて、レントゲンもそのまま利用してもらえると、余分な検査の時間もかからなくて、高齢者にとってはありがたい。
- 高齢者が不安になる理由の1つに、自宅の値段が下がるというのがある。海外では住んでいる間に値段が上がり、老後に自宅を売って住み替えるという人もたくさんいるが、日本だと買った瞬間が一番高く、住んでいる間にどんどん下がっていき、資産価値がほとんどなくなる。何か資産価値を維持できるような方法があれば、安心して暮らせるのではないか。

#### **松本委員：**

- 高齢者と一口に言っても、まだ元気な動ける高齢者と、体力的に大変な高齢者とに分かれると思う。動ける高齢者は、定年で会社を辞めた後も、蓄積した知識や経験を使って、どこかに貢献したいという気持ちがあるので、動ける期間はどこかで働いてもらうのが良いと思う。それから、資料の分析の中で、様々な政策の示唆があるが、これは全くその通りだ。
- つながりについては、宮崎委員からもお話があったが、地域の人や友人などとのつながりの場がとても重要だと思う。
- 健康の問題について、平均寿命と健康寿命とは異なっている。例えば、男性の場合、平均寿命が80歳とすると、健康寿命は72歳くらいまでらしいので、残り8年間はどこかで横になっていることになる。そういう点では、動ける人と動けない人と、年齢である程度分けてみても良いかもしれない。それから、これは人生観に関わるが「病気になったら医者が色々お世話をして生かす」という現在の医療体制とは異なる、「誰の世話にもならず苦しまないで死にたい」という考え方がある。そういう考え方についても高齢者に周知していくと、人生の終わり方が選択できるのではないか。最近、私の友人が、余命を医者から宣言されて、「自分は生きるだけ生きた。残りの人生を治療で入

院したりせず、充実した時間を過ごす」という選択をした。家族に迷惑をかけず、ただし痛みの無いように終末医療だけはやってもらうという生き方もある。高齢者といっても、年齢層によってステージが違うので、様々な生き方を紹介することがあっても良いと思う。

#### **西村委員：**

- ・松本委員の話を聞きながら、なぜ年を取ると不安なのか、自分に置き換えて考えていた。最近、「人の死」に直面することが多く、叔父が倒れて足が動かなくなったり、会議中に隣の方が突然倒れて亡くなられたりした。身体が弱っていくと、今までできたことができなくなって、死の方に悩むのではないか。あるいは、「惨めに老後を迎えたくない」とか「安心して死ぬのだろうか」という不安もあると思う。また、日本では「結婚して子どもがいて安定した生活をするのが幸せ」という典型的な家族像があって、そこから外れた人が不安を抱えているかもしれない。どんなライフスタイルでも、最期は綺麗に安心して死ぬことができるという環境整備をすると良い。
- ・私が去年7つの市町を回って地方版総合戦略を練っていく過程で、普段は話す機会のない、おじいさん、おばあさんと話をしたが、想像と大きく違った。例えば、田舎では、おばちゃん達が地域のことを色々取り仕切っているかと言うと、実はそうではなくて、田舎ほど孤立している。紀北町や大台町で、シングルマザーや婦人会の代表をしている70～80歳くらいの人など、色んな人と一緒に話をしたのだが、同じ町内に住んでいても初めて知り合ったと言う。誰がどこに住んでいるのか知らない縦割りの社会が、田舎でもできている。昔から皆さんが当たり前と思っていた社会が、今は大きく姿が変わったという前提に立って、積極的に動く必要がある。
- ・高齢者の健康に関して、意外と年を取っていても元気だ、ということが分かった。大台町では、60～70歳代のお母さん達が筋トレにはまっているそうだ。将来、地域の人達に迷惑をかけないように、身体を鍛えているらしい。松阪市のジムなどで、昔の同級生と会って同窓会みたいなことをして楽しんでいる。田舎では、地域のつながりが意外な形で生まれている。こんな風に、気楽に考えても良いのではないか。県庁の皆さんは、何か先入観、理想像があって、それに当てはまらなければ不幸だと手当てる傾向がある。そうではなく、どんな生き方でも良くて、最期は誰かが面倒を見てくれる、気楽に生きられる社会を作れたら良い。

#### **田中委員：**

- ・高齢者を2つに分けると、働ける人と、サポートが必要な働けない人ということになる。
- ・まず、働ける人には、何らかの仕事をしてもらうよう手配して、張り合いを作ることが重要だ。私の所属する事業構想大学院大学が内閣府と一緒に始め

る「地方創生カレッジ事業」では、教育指導者養成講座というものを提案している。これは、専門家と言われる人だけでなく、経理や総務など一般的な仕事をやってきた方も、自分が経験してきたことを活かして、地元の中小企業や学校、公民館等で指導者として活躍できるようにするためのものだ。65歳になる前からスキルを練習して、働ける時間を長くしようというのが1つの方針だ。こういうことができると良いと考えている。

- また、サポートが必要な働けない人については、一日中時間を持て余している人が結構いる。やはり、居場所やつながり、コミュニティというものが唯一の生きがいになると思うので、安心して参加できるイベントや集まりを、県や市町が連携して提供してくれることを期待している。
- 知り合いの地域包括ケアをやっている病院では、高齢者が多いので、自分の気に入ったものを病院に持ってきてもらい、自分ギャラリーみたいなことをやっている。患者や地域の方は友達を呼んで、自慢のものを見せたり話をしたりして、元気を出すきっかけになる。そういうことを提供する病院があっても良い。
- 高齢で車に乗っている人は結構いると思うが、こういう方々が免許を返してしまうと元気でいられなくなるのではないかという心配もある。免許を返した人にはクーポンを提供するといった制度もあるのかもしれないが、車に乗らなくなるタイミングで地域交通についてどう対応するのかということも課題であり、その辺りを行政にお願いしたいところである。

#### **鈴木知事：**

- 松本委員から出た「終末の迎え方」については、実は私の父親が現在、がんに侵されており、本人も緩和ケアを望んでいる状況にあることから、私自身その問題を身近に感じている。我々は消費者対策や女性活躍のところでは、多様なライフスタイル、多様な家族体系などと言うのに、高齢者対策については、あまり多様なライフサイクルとは言わない。高齢者の多様なライフサイクルということをもっと意識する必要がある。
- 10月に国内外の研究者を集めて、三重県で「認知症サミット」を開催する。先般、神戸でG7の保健相会合が開催され、その中で認知症対策の強化が初めて明確に盛り込まれた。新興国やASEANの人達も、日本の高齢者対策に高い関心を持っている。三重県は今後、この認知症サミットを機にさらに認知症対策を進めていく。今、各市町に認知症初期集中支援チームとして、多職種の人達がチームを作ることになっている。三重県はその設置率が全国1位と、認知症対策が進んでいる地域ということもあるので、広い範囲での認知症対策に力を入れていきたい。年を取れば、当然、脳の機能が劣化して、認知症になる。認知症の人が増えるというのは自然の摂理だと思うので、その部分についてしっかりやっていきたい。
- 元気な高齢者の人々を増やすためには、若い頃からの生活習慣が大切だと思

っている。最近、三重県が注目されている中の1つに、BMI（肥満度指数）が全国で一番低いということがある。今度、テレビ番組でも、三重県のBMIが低いと特集されることになっている。高齢者のより多様なライフサイクルを実現するためにも、若い時からの生活習慣や健康に気を付けたり、健康増進などにも力を入れていきたい。

#### **速水委員（座長）：**

- ・高齢者で働く人の話が出ているが、東紀州にいと、わずかでもお金を稼げるということが、高齢者にかなり充実感を与えていると感じる。例えば、高齢者が地域でグループを作って、稼いだお金を皆に分配して、残りを自分達の活動費用に充てながら、公園を整備するというをやっている。そのグループに入りたい高齢者は、お金を稼ぐことの充実感を求めているのだろう。そういう意味では、ただ意義のある働きというより、少しでも稼げるということが大事だと考えている。
- ・ハワイを訪れた際、たくさん的高齢者が働いていた。現地の人に理由を尋ねてみると、定年という制度がなく、働きたい人は働きたいだけ働くというスタイルが定着しているようだ。実際、例えば洋服を買う時、年配の人が一目見てサイズを選んでくれて、若い人よりもスピーディに対応してくれたりする。慣れている分、年配の店員に接客してもらうほうが安心だ。定年は企業が制度としてやっているの、県がどうしろということは言わないが、やはり、高齢者がずっと働けて、若い人達と比較して技能をちゃんと評価されるという状況が何らかの形でできれば良い。
- ・高齢者の交通の問題だが、免許を返せと言って地方の人間から車を取り上げてしまうと、もうどうしようもない。だから、公共交通機関なり、そういうものの整備の度合いを詳細に調べて、ある程度の区域に関しては、どういう交通機関を提供すれば高齢者も使えて、リーズナブルなコストでやれるかということを実際に考えなければならない時代になった。
- ・高齢者も若い人も含めて、皆の集まる場所をもう1回考える必要がある。今で言えばコミュニティカフェということになるかもしれないが、100円玉1個持って行って、コーヒーやお茶を飲んだり、将棋や囲碁、カラオケができたような場所があると良い。

#### **宮崎委員：**

- ・速水委員も指摘されていた交通の問題で、日本では結局、根付いていないが、Uber（ウーバー）のような配車サービスは田舎ほど良いと思う。特区でも何でも良いので、是非こういうものを三重県でも先駆的にやって行くと良い。

#### **鈴木知事：**

- ・まだ構想段階だが、南伊勢町で自動走行とUber（ウーバー）的なものを組み

合わせた実証実験のようなことができないかと企画している。まさに南伊勢町は高齢化率や人口減少率が高いところなので、そういうところに自動運転やオンデマンドで効率的にやっていくというのができればいいと思う。まだ課題は多いが、そういうアイデアも出ている。

**松本委員：**

- ・先ほどお話ししたことに関連するが、日本では扶養義務が民法に定められていて、子どもや周りの人が、死に方について高齢者に話をしにくい。長生きするのが大変良いことで、高齢者本人の意思とは別に、長生きしてもらおうという社会になっている。高齢者が自分の終わり方をきちんと考える場や情報を提供すると良い。終末ケアの分野を専門にされている医者の話などをもう少し広く知らせていくと、高齢者は深く考えることができるのではないか。

**速水委員（座長）：**

- ・医者というのは医療だけに限って説明する人が多い。もう少し幅の広い説明が聞ければ、判断しやすいのではないか。

**西村委員：**

- ・人生の終わり方のようなものを学んだり考えたりする場を作るなら、例えば県立看護大学などで、もう少し終末医療とかをやると良い。日本の医療の世界では、医者と看護師の役割分担や上下関係がある。しかし、終末医療は、医療は医者が行うという考え方ではなく、看護師を中心にした方が良いかもしれない。看護師の皆さんの活躍の場にもなる。行政が、市民の声を聞き上げて、終末医療の体制を作り上げて良い。三重県は三重県なりに、人生の終わりの迎え方に対する体制を作っていく方法を考えてはどうか。

**鈴木知事：**

- ・三重県には、がんによる死亡率というのが全国で2番目に低かったり、死亡原因のうち自然死の比率が一桁台だったりするという特性がある。

**速水委員（座長）：**

- ・三重県は競技スポーツから市民スポーツへ大きな変化を遂げようとしたのだが、うまくいっていないように思う。もう1回、市民スポーツの組み直しができるとう良い。例えば、高齢者の健康管理スポーツのようなものから競技スポーツまで、地域の中のスポーツ団体をなるべく1つにまとめていって、責任を持たせる。そこに制度として、各市町村で保険の負担が減った分をスポーツ団体にお金が回るようにする。さらに、保健師も含めて食事をコントロールするといったように、様々なことをスポーツに絡めて、スポーツ団体を整理し直してみるとうまくいくような気がする。他県で成功しかかっている

例も聞くし、それをやらないと、高齢者のスポーツはある程度の金額が払える人しかできないものという状態になる。

#### 鈴木知事：

- ・座長から出た市民スポーツや高齢者が運動することによる効果については、資料の中にいなべ市の「元気づくりシステム」を挙げている。これは平成 20 年の調査だが、「元気づくりシステム」に参加している人と不参加の人の医療費を見ると、参加している人の方が約 30% も低い。健康の指標をこれだけ改善したらスポーツ器具が買えるとか、インセンティブシステムが作れると面白いと思う。

#### 議題 「第 5 回みえ県民意識調査」結果から考える県政の課題

- ・ 少子化対策（結婚の希望がかなう社会づくり）
- ・ 女性活躍の推進

#### 田中委員：

- ・少子化対策については、日本人は結婚しないと子どもを産めないという順番があるので、まず結婚してもらおうことだと思う。多くの若者が、付き合っている人がいないというデータもあり、付き合うきっかけがないといけなと思うが、今は世話を焼く年配の方もおらず、自ら探すこともない。街コンなど様々なプロジェクトがあったが、多様な人が出逢う場所というものを、もっと工夫しないといけな。同級生同士で結婚というパターンは羨ましくもあり、楽しそうに思えるので、例えば同窓会といったものを若い時から活用できるように、きっかけを提供できれば良いと感じている。
- ・公共的などころがサービスするお見合いの場においては、同じ県内でも津の人と伊賀の人が出逢うというように、違う地域の方が出逢うきっかけになる。やはり、イベントのような機会を提示することは特に県民が待ち望んでいるだろうし、難しいところもあるが、自然な形で結婚できると良いと思う。
- ・女性活躍については、国が先導しているプログラムは大企業向けのものが主流であり、中小企業における女性活躍はまだロールモデルもなく、会社の手配も不十分であると感じられる。そこで、中小企業の女性管理職のサミットのようなものを開催してはどうか。狭い世界の中で忙しく仕事をしていて、よそのことは見えないけれども責任を抱えて本気で仕事に取り組んでいるという女性管理職の方々に対して、良い機会を与えられると思う。
- ・地元の学生にもロールモデルを早くから見せて、30 歳、40 歳になっても県内で活躍する女性がいるということを提示できると良い。また、女性の中には、活躍したくても役員のような重い仕事には就きたくないという気持ちを持つ人もいるので、そうした役職に就くこと自体は足枷にならない、ということを理解してもらおうよう、今あるイメージや枠組みを壊すような情報提供が必

要だ。

- ・情報提供は、色々なイベントで発信するとともに、イベントに参加した人にとどまらず、ツイッターやフェイスブックを活用して広く発信してもらうことが有効であると思う。

#### **西村委員：**

- ・明日、私の研究室で働いている研究員の女性の結婚式に出席する。正式な職員ではなくパートで、3年くらいでキャリアを積んだら出て行っても良いという雇い方をしている。別の女性も結婚する予定で、大学を出て先生をやっていたが、働き方を2～3年考えたいから研究員という形を取っている。そんな子達が、今度立て続けに結婚する。私の感覚では、ゆとり世代の結婚率は少し上の世代より上がっているのではないかと思う。明日結婚式を挙げる子には挨拶を頼まれた。形だけでも三重大学の副学長の私に、結婚式で挨拶を頼む人なんて、僕の助手か、相当仕込んであげた学生くらいだ。それくらい軽い感覚で、ゆとり世代くらいの若い子には結婚する人が出てきた。一方で、私の研究室には未婚の人やシングルマザーもいて、何となく世代が見えてくる。30歳前後の人は結婚していなくて、40歳くらいになるとシングルマザー層になる。日本人は、「結婚して子どもを生んで幸せな家庭」みたいな理想像を描いて、そこから外れると不幸になると思い込んで、結婚することに対して構え過ぎているのではないか。
- ・高齢社会についてもそうだが、気楽さみたいなもの、多様な生き方を認めてあげることが重要だ。最近、日本人はその日暮らしに対する恐怖感が強い、という話を聞いた。三重県なら、そんなに生活にお金は掛からなくて、追い込まれなくても生きて行けて、肩の力を抜いて子どもを育てたり、定年したらのんびりした生活ができるという発信をしても良い。特に女性の問題では、3時間だけのネイルリストや手芸教室など、パートタイム起業が最近話題になっている。商店街の貸し店舗みたいところで、100人くらいの主婦達が仕事をシェアするなど、気楽な肩の力を抜いた生き方を認めていくのはどうか。

#### **松本委員：**

- ・少子化対策で資料に書いてある「若者の経済状況を改善すること」をすぐ実現することは、なかなか難しいので、家事や育児、就業に関する特に共働きの男女の「多様な形の役割分担を支援すること」が大事ではないか。
- ・それから、「結婚に対してポジティブなイメージを持てるような環境を整備する」と書いてあるが、具体的にどのようなことなのか。私の周囲では、最近の若い人は出逢いの場があまり無いようだ。少子化対策や結婚の希望がかなう社会づくりというのは、安心できる出逢いの場を提供することだと思う。東京では結婚できない人が多い一方で、三重県では環境が違うので、そういった三重県の強みを若い人達にアピールしていくと良い。



- ・女性の社会進出について、確かに大企業では、管理職比率を上げるなど一生懸命努力している。しかし、女性の人材がある程度育ったところで、結婚して辞めてしまったりするので、人材育成に投資したのが無駄になることもあって、なかなか難しい。やはり、女性の就業支援と子育て支援をセットでやらないといけない。高齢者のことにも関連するが、昔だと、母親が仕事をしている間は、家にいるおばあちゃんが子どもの面倒を見てくれたが、今は、地域で健康な高齢者にどうやって子育てに関わってもらおうかということが大事ではないか。

#### **宮崎委員：**

- ・最近是不分らないが、昔のヤンキーと呼ばれる人達は非常に若くに結婚して、ちゃんと食べていて、子どもをたくさん育てられるという人が結構いた。
- ・経営者として凄く嬉しいことは、会社の若い人が結婚していくことだ。つまり、うちの会社は社員が結婚できる環境にあることを示しているからだ。いつまでもたっても社員が結婚できないというのは、それは会社の収入が少ないということなので、経営者としては凄くつらいと思う。
- ・配偶者控除の「配偶者」という時に、ほとんどの人が女性をイメージするが、男性が配偶者であっても良い。女性をイメージすること自体、この国がなかなか結婚しにくい状況を表しているのではないか。
- ・女性の活躍ということであれば、中小企業で女性を総合職として採用した時に若干の補助をするなどの施策があっても良いのではないか。インセンティブとは言わないが、行政に少し後押ししていただかないと、我々中小企業ではなかなかできない。今後、夫婦控除に制度が変わるようだが、どちらが配偶者でも変わらないという意識でやらないと、なかなか結婚できないと思う。

#### **速水委員（座長）：**

- ・三重県が思い切って、結婚しなくてもパートナーがいれば良いというように、家庭のパターンを何でも認められると良い。パートナーがいれば良いということをお勧めする必要はないが、認めないと子どもは増えないのではないか。私の田舎では、元々人数が少ないこともあるが、クラス全員、学年全員が一人親ということがたまにある。皆、子どもを連れて帰ってきてしまったのだが、全くおかしいことではない。そういう懐の深さを、支援策や計画の中に出していかなざるを得ない時代になってきた。原則と違っていても、それも美しい家庭なのだと見なければいけないし、三重県は極めて自由に暮らせる場所なのだと捉えられると良い。
- ・女性の活躍については、子どもを育てる間に、女性がキャリアをどうやって維持できるのかということが大事だと思う。例えば、県庁に0歳児からでも引き受ける保育室を作って、最初にまず県庁でやるぞという意思表示するのはどうか。育児休暇を男も女も取りなさいと言うよりは、「ちょっと休んだ

ら子どもを連れてきて、ここへ預けていれば働いて良いよ」と言う方が、キャリアを維持できると思うし、そんなパターンがあっても良いと思う。

- ・小学校に上がると子どもが親より早く帰宅してしまうということであれば、地域での学童保育を充実させることも必要だろう。このように、女性・子ども・家庭をトータルでみた俯瞰的な県の施策というものが必要になる。そして県がやるべきところ、市町村がやるべきところ、国にお願いしなければならないところというように分かれてくるだろう。

### 鈴木知事：

- ・出逢いの場については、三重県は「みえ出逢いサポートセンター」というのを四日市に作っている。ただ、これは県が自ら街コンみたいなことをするのではなく、各市町でやっている取組を登録してもらい、登録していただいている人に情報提供を行ったり、親や本人向けのセミナーを実施したり、相談を受けたりするものだ。ある調査によれば、出逢いの3～4割は企業内だそうだ。三重県では、結婚を応援している企業や団体など、現在のところ120社くらいに登録してもらっている。
- ・西村委員から出た、ゆとり世代など世代別の出生率の話については、まだ細かく分析していないが、三重県では、昨年の合計特殊出生率が1.51と過去20年間で平成22年と並んで一番高い値になった。我々、第2次ベビーブームの世代が40歳を超えてきているにも関わらず、出生率が上がっているということは、おそらく西村委員の推定がある程度正しいのではないか。
- ・松本委員から出た、結婚にポジティブなイメージが持てるような環境の整備ということは、啓発やキャンペーンなどで知ってもらおうという雰囲気づくりのようなイメージだ。国の調査では、現在、子どもがいない人に「持つつもりの子どもの数が理想の子どもの数より少ない理由は何ですか」と尋ねたら、40.4%の人が「子育てや教育にお金がかかり過ぎる」からと答えている。三重県の調査で子どもがいない人に同じ質問をしたところ、85.7%の人が「子育てや教育にお金がかかり過ぎる」と回答している。国の調査結果と県のギャップが大きいので、結婚や子育てのイメージをポジティブなものに変えていく必要があると思っている。ある民間企業の調査では、QOM（クオリティ・オブ・マリッジ）、つまり結婚による満足度が、三重県はトータルで45位くらいとなっている。しかも、女性の結婚満足度が特に低くなっており、こういうイメージを是非変えていきたい。
- ・女性活躍について、経済協力開発機構（OECD）東京センター長の村上由美子さんが出した「武器としての人口減社会」という本にもあるように、早期のキャリア形成が重要だと考えている。海外ではよくあると思うが、男性も女性も40歳くらいになってから今後のキャリアを考えるのではなくて、もっと若い20歳代前半の時期にいかにかキャリア形成をしていくかが重要だと思う。
- ・色々なライフパターン、家庭パターンがあって、気楽な感じで良いという意

見は全くその通りだと思う。私は全国の里親や養子縁組の会長もやっており、色んなパターンの家族があつて良いと思っている。家族の多様性について寛容度の高い三重県であるというのは大事であり、そういうメッセージはどんどん出していかないといけない。

**松本委員：**

- ・三重県の共働き率は、全国的にみてどういった位置付けなのか。それから、子どもを抱えるお母さんが、おばあさんなどに預けて働いている比率は分かるのか。これからは、共働きを前提で考えて子育てシステムを作っていく必要がある。

**鈴木知事：**

- ・正確なデータは分からないが、三重県の共働き率は全国の中で真ん中より低く、M字カーブも、共働き率の高い福井県などと比べると、Mの中央のくぼみが深い。
- ・結婚や出産を機に、辞めて再就職する、あるいは休暇を取って復帰するという、中断型か継続型かという意向調査で言うと、全国は継続型が多いが、三重県は中断型を選択したいという人が多い。

以上